

## 『海国圖志』と『亜墨利加総記後編』とをめぐって

— 国名、地名を中心に —

孫 桂 琴

—

### 1 はじめに

19世紀末に、日本で造出された漢字が中国に逆輸入された所謂「日本語借用語」、例えば「公園、司会」などがあるが、日本における幕末から明治にかけて、日本は中国の語彙、所謂漢語を借用して、学術用語を始めとして、多くの分野で多用していることは自明である。

日本が外国語をオランダ語から英語に切り換えたのは、文化5年(1808年)のフェイトン号の事件がきっかけであるが、その後の英語の修得に中国に関わる文献が多かれ少なかれ関与していることは言うまでも無い。

江戸時代は、中国との貿易は、長崎に限られていて、長崎は日本における唯一の開港場であったが、ここに入港する「唐船」で、どれほど中国の書籍が運ばれたかは不明であるが、「江戸時代における唐船持渡書の研究」(関西大学出版部)によれば、書籍に関しては「比重は極めて低いものは確かで、決して船底一杯に書籍を積んでくるようなものではなかった。」(同書12ページ)とある。とは言え幕末になると、諸外国との交渉が密になり、鎖国していた日本も、今日的な用語で言えば、国際事情に無関心ではいられなくなり、否応無く世界の事情に関する調査を行っている。

幕末の日本にとって、世界についての、特に西洋についての知識を得ることは、日本が日本国を守るために、絶対必要なことであった。世界の人々、とりわけ西洋人の人々と直接的に実際の交流をもつことは、もちろんのことである。もう一方は、中国を通じての西洋についての情報の取得ということである。

幕末時代の学者文人たちは、漢文の素養のないものはなかった。それ故、漢文をもって著わされた中国清朝の『海国図志』は、時の人士に広く用いられるに最もよい条件を持っていた。鮎沢信太郎氏が「魏源の『海国図志』は、近世支那における世界地理書として著名の良書である。わが幕末開国期にあたって傳來したこの『海国図志』は、対外問題に心ある人々の間に熱心に読まれた。時の人々の欧米諸国に対する認識は本書によって導かれた所が少なくない。」一昭和28年には、開国百年記念文化事業会が「鎖国時代 日本人の海外知識」を編纂して、(135頁)前述のように語った。

## 2 『海国図志』とは

『海国図志』は、中国清朝欽差大臣、林則徐（1785—1865）が、海外事情を知るために、広東で袁德輝等に翻訳させた西洋人の著書や海外諸国に関する記事及びその他の文章を元にし、海外諸国の地理、歴史、政治、経済、軍事、文化、教育、宗教などの現状を記した「四洲志」ならびに彼が捜し求めた船砲の模型図などを魏源（1794—1857）に与え、『海国図志』の選集を頼んだ。19世紀前半の中国における啓蒙思想家であると同時に経世の実務家でありながら文学者として名高い清末の官僚魏源が林則徐からもらった資料を分類、増補されて、歴代の史表、明以来の島志、及び夷国、夷語をもって補い、その結果「東南洋、西南洋、大小西洋、北洋、外大西洋、西南洋」の部分は原書の『四洲志』の6、8割増にし、自分の考えや本文への批評など、多くの地図や表を加えたものを編集した。これは中国で編纂された最初の世界地理書である。

魏源は当時、中国がイギリスからの阿片密輸入を取締りのために起こした阿片戦争後、西洋の軍事技術を学ぶことが中国にとって、もっとも緊急の課題として、[夷の長技を師とし、以て夷を制する]と主張し、『四洲志』を蘭本として、編輯した世界地理書『海国図志』の増補した内容のうち、軍事技術に関する文献や軍艦、大砲、その他の兵器など、『海国図志』の首巻の海防論を始め、魏源自身が撰した抜粋した名著は、中国ばかりでなく、日本においても海外知識の普及に大いに役立ったことは言うまでも無い。

## 3 『海国図志』の版について

『海国図志』は、当時の中国の官僚、読書人に最も欠けていた世界情勢に関する知識を啓蒙する画期的な書物であった。そして魏源の名を一層不朽にしたのが『海国図志』である。魏源は堂名を古微堂と称した。魏源が『四洲志』を増補して、1943年に50巻本を刊行し、さらに1847年に60巻本（24冊）が揚州で刊行され、1849年に再版され、さらに咸豊2年（1852年）に再び増補されて100巻本（34冊）が刊行された。これを定本とした。50巻本、60巻本、100巻本にあわせて3種のテキストがあり、魏源死後も、この百巻本は、中国の各地で復刻が続いた。後ほど、魏源の族孫が、光緒2年100巻本を再刊行し、続集25巻本が刊行された。（注）

その後、重刻、重版されたものに、定本の誤字、誤植を改定した巻本もあるし、補修改版にあたって、一行の字数に増減があったり、本文と割注を置き換えたり、文章の改変が多少ある。が、その体裁は同一である。巻数の点では、増補改版のために、定本の初版本の倍に増加していることも当然認められる。

周知のように、『海国図志』の骨格をなしているのは、『四洲志』である。しかし、『四洲志』の原本の著者について、日本の有名な研究者の内に、次のようにいくつかの違う観点が主張している。

その主張の一つは（『鎖国時代 日本人の海外知識』四 136頁）広瀬竹庵の和訳した『続重墨利加総記』には、幸いに『四洲志』の原書に載せた「原志序」が出ている。それはすなわち「～道光十八

年歳次戊戌孟夏。高理文新嘉坡の堅夏書院にて題す」とある。「高理文」とはColemanを漢字に当てたもの。『海国図志』には、「欧羅巴人原撰」とあるがこの欧羅巴人とは、漢名を高理文或は裨治文Bridgmanと称する者で、アメリカ公理会最初の支那渡來宣教師の一人である。鮎沢信太郎氏は「要するにこのブリッジマンの原著を林則徐が翻訳して『四洲志』と名付けた」と結論している。

その主張のもう一つは、源了圓氏著した『思想』という本の中に、注釈として、『四洲志』の原本の著者について、次のように、述べられている。「従来は、『海国図志』の蘭本である『四洲志』は、米国人ブリッジマンの著わした『万国地理書』の翻訳とされており、私もこれまでそれに従っていたが、百瀬弘氏によって、明らかにされ、「海国図志小考」(岩井博士「古記稀記念論文集」所収1963) 佐々木正哉氏によって確認された。「『海国図志』余談」「近世中国」十七(1985)の所によると、『四洲志』の原著はヒューマレーの「地理全書」ということであるから、以後これに従う」と書いてある。

佐々木正哉氏は『近世中国』十七(1985)『海国図志』余談にこれに関して、次のようにブリッジマンの原著を林則徐が翻訳して『四洲志』(道光十八年著)と名付けた。と鮎沢信太郎氏が結論している。が、『海国図志』の60巻本の「原志序」は、『大美聯邦志略』に「原序」として転載されているが、ブリッジマンが書いたのは、アメリカ志であって、「四洲志」とは無関係なことに気付いたのであろうが、鮎沢氏が誤った先入観のために担懐たるを得なかったのであろう。故百瀬弘氏が昭和38年に発表された「海国図志小考」には『四洲志』がヒューマレーの世界地理書の抄訳であることが淡々と述べられている。爾来二十有余年、大正末年以来の謬説が一向に革まる気配がないので、敢えて蛇足を加えた次第である。(167頁)と述べられた。

百瀬弘氏は、『海国図志小考』のなかで、指摘したように：「周知のように、阿片戦争中、林則徐が広東で訳出させた稿本四洲志すなわちイギリスの地理学者ヒューマレーの世界地理書 Hugh Murray, An Encyclopaedia of Geography, a Description of the Earth, physical, statistical, civil and political の1834年初版本の抄訳である。(692頁)」3種のテキストとともに、魏源が、本文中には、「原本」とか「原有」とか注記されて、その巻首に必ず「欧羅巴人原撰、候官林則徐訳、邵陽魏源重輯」と三行を平行して、記され、他の諸巻と区別として、魏源輯とか魏源撰とか注記される。「欧羅巴人原撰」と書いてあるが、ヨーロッパ人の原撰で、百瀬氏に従って、原著はアメリカ人のブリッジマンでなく、イギリス人のヒューマレーであると判断する。

#### 4 中国における『海国図志』の所在について

50巻の初刻本は、部数が少なかつたためか、一般にはあまり知られていなかった。60巻本、100巻本の増巻、再版されたことによって、だんだん『海国図志』が広く流布するようになった。現在、中国における『海国図志』の所在については、現時点わたしの調査によりますと、次の通りである。

北京大学図書館蔵

- 50巻本 道光24年邵陽魏氏古微堂刻本 (1844) 12冊 2函
- 60巻本 道光27年楊州刻本 (1847)
- 100巻本 咸豊2年刻本 (1852)
- 100巻本 光緒2年刻本 (1876) 32冊 3函
- 100巻本 光緒6年刻本邵陽急当務齋刻本 (1880) 32冊 4函

上海図書館古籍部に在庫している『海国図志』

- 50巻本 道光24年邵陽魏源選古微堂本活字本 (1844) 20冊、他に1部20冊
- 60巻本 道光29年邵陽魏源 (黙深) 撰古微堂楊州增補刻本 (1849) 16冊
- 100巻本 咸豊2年邵陽魏源 (黙深) 撰古微堂刻本 (1852) 24冊他に1部24冊
- 100巻本 同治6年邵陽魏源撰郴州陳氏重刻本 (1867) 24冊
- 100巻本 光緒2年邵陽魏源撰 平慶涇固道署重刻本 (1876) 32冊
- 100巻本 光緒21年邵陽魏源撰 上海書局石印本 (1895) 14冊
- 100巻本続集25巻 光緒24年邵陽魏源撰 続集 (英) 麦高爾撰 (米) 林樂知  
(清宝山) 濯昂来注 (1898) 文賢閣石印本14冊
- 続集25巻 光緒21年輯 (英) 麦高爾撰 (米) 林樂知 (清宝山) 濯昂来注 (1895) 上海書局石印本  
手鈔本「叙東南洋」至「附論黄河」魏源撰

華東師範大学図書館

- 50巻本 魏源撰道光22年邵陽魏源古微堂木活字本 (1842) 19冊
- 100巻本 魏源輯 光緒2年急当務齋刊本 (1880) 24冊
- 続集25巻首1巻魏源輯 光緒2年 (1870) 平慶 固道重刊36冊
- 100巻本巻首1巻 年代不明
- 100巻本 魏源 存6冊巻24—巻45刊本 存6冊 巻29—巻60刊本

長春図書館

- 100巻本 咸豊壬子年古微堂重刊定本魏源 (18542) 24冊
- 100巻本 海国図志正集 光緒壬寅年 (1902) 春 文賢閣石印14冊
- 増広海国図志 道光19年乙亥 (1839) 51巻—100巻まで
- 海国図志続集 光緒乙未年 (1895) 巻1—巻10のみ
- 海国図志2冊 巻5—巻9 「東南洋叙—海岸国」  
巻63—巻69 「外大西洋墨利加州—外大西洋南州各国」

東北師範大学図書館古籍部蔵

海国図志正集100巻本 光緒乙未年 (1895) 全8冊

中国には調査することによって、100巻本の同治6年の刻本と光緒元年、光緒21年の石印本、光緒2年の重刊本と刻本、光緒6年の刻本、光緒24年の刻本がある。他にもまだまだ多くの本があるようで、いずれにしても、今回北京、上海、長春だけでの調査を以上のように報告する。

## 5 日本における和訳本、翻刻本などについて

阿片戦争を中国の清朝と戦って東洋経営の足場を固めたイギリスについては、当時の一般の人々は、あまり多くを知らなかった。『海国図志』は、阿片戦争に際し、事務の急用に応じて、生まれた中国近代における世界地理書の白眉とは言え、欧米列強の東洋進出の前には、全く同じ歴史的運命にさらされた幕末の日本は、世界の地理を始め、『海国図志』の研究に学者文人が、全力をあげて、嘉永7年(安政元年)から、わずか1、2年の間に、『海国図志』は、和訳本、訓点翻刻本など実に20種ほどがある。しかし、これらの諸本における文献のうち、どれが日本に入ってきたか、思想に関わるか、政治に関わるか、地理に関わるか、文学に関わるかは、そのアプローチによることであるが、昭和28年には、開国百年記念文化事業会が、「鎖国時代 日本人の海外知識」を編纂して、そこには鮎澤信太郎氏による『海国図志』とそれを日本で翻刻したもの、和訳したものなどについて、詳細に述べられている。

和訳本と訓点本のうち、日本の幕末開国期当初の世界地理研究の性格の中、最も特徴のある所の国防上からあるいは国策上から、当時の人々がこの本を研究の役に立つ情報を提供するものとして読んでいたことを示す。内容によって、アメリカに関するところが6種。イギリスの東洋経営に関する記録など国防資料の部が5種、イギリスに関するものが3種。プロシヤ、インド、ロシア、フランスに関するものが各1部となる。

## 6 研究の中心としての資料は60巻本でなければならないことについて

『海国図志』が日本に入り、数多くの訓点本や翻刻本や和訳本が出版されている。これらの和訳本あるいは翻刻本のうち、何故研究の中心としての資料は、60巻本でなければならないか。このことについて、「日中文化交流史叢書3」源了圓氏の『幕末日本における中国を通じての「西洋学習」—「海国図志」の受容を中心として』の中で、「わが国が翻刻されたものは、23種もある。和訳本が16種類も出た。」「塩谷 箕作の翻刻本は60巻であった。」と述べた。つまり魏源が、林則徐の『四洲志』(50巻本)を編輯した最初の50巻本の『海国図志』を増補して、60巻本としたものが幕末の日本に輸入されて、イギリス、ロシア、アメリカなどの列強に開国を迫られた日本の愛国志士が、日本にとって必要だと思う所だけを和訳或いは翻刻されたようだ、筆者は、広瀬達氏訳した『亜米利加総記』、『続亜米利加総記』、正本篤氏訳した『墨利加洲沿革総説総記補輯和解』、『美利哥国総記和解』などの和訳本を『海国図志』の原本と詳しく対照し、その結果として、確かに魏源の60巻本揚州本だけが、日本に輸入され、

翻刻あるいは和訳されたことは、間違いないと考える。

二

和訳本の原本の『海国図志』と対照して、

国名、地名、普通名詞の異同から見て

1 和訳された『亜墨利加総記後編』と原本『海国図志』の国名、地名、人名、の異同について

『海国図志』の原本としての外国の国名、地名、人名、所謂 中国語としての外来語の漢字表記について、中国本土における同音字あるいは類音字を借用して、明らかに表記されているが、日本での漢字表記の歴史的な変遷を見る場合、所謂 ヨーロッパ系統とアメリカ系統の資料の翻訳に対して、アジア系統のものは、纏まっていない面がある。日本にとって、外国の地名、人名の漢字表記は、幕末までにオランダ文献を中心として記述され、幕末になると、中、英、米、仏、など多種を極めてくる。その中で、中国資料については余り問題にされていない面もある。そういう意味からしても、『海国図志』の原本としての表記が、日本で和訳された場合、人名、地名がそのままかどうかという面も含めて、記述しておく必要がある。まず、比較の対象として、原著の60巻本「外大西洋北墨利加洲」巻39の彌利堅國即育奈士迭國総記下原本 案粵人卷咸称曰彌利堅國又曰花旗國と広瀬達氏の和訳本『亜墨利加総記後編』の「合衆國東路二十部 沿革ハ各部中ニ分テ附録ス 弥利堅州ノ育奈士迭國ハ士迭ヲ分ツ」から始まって、国、州、地名、人名の漢字表記について、次のようになる。

原本の表記	和訳本と読み		回数
1 国名			
北墨利加洲	阿墨利加		1
彌利堅國	合衆國	ガシユウコク	12
彌利堅	弥利堅	メリケン	1
美利加	亜米利加	アメリカ	1
彌利哥	亜米利加	アメリカ	1
美利哥國	合衆國	ガシユウコク	3
美理哥國	美理哥國	ミリカコク	12
中国	支那	カラ	3
華	支那	カラ	1
中華	支那	カラ	1
英国	英吉利	イギリス イギリス	7

英	英吉利	イギリス	イギリス	2
英吉利	英国	エイコク		7
英吉利	英吉利	イギリス	イギリス	28
千那大	千那大	カナダ		1
千那大	千那大	カナダ		1
佛蘭西	佛蘭西	フランス		1
荷蘭	荷蘭	オランダ		1
瑞典	瑞典	スエーデン		2
新瑞典	新瑞典	ノースウェーデン		1
2 洲名、都市名				
歐羅巴	歐羅巴	エウロッパ		1
紐育	紐育	ニューヨーク		4
新約基	新約基	ニューヨーク		7
紐蘭頓	紐蘭頓	ニューロンドン		1
蘭墩	蘭頓	ロンドン		1
華盛頓	華盛頓	ワシントン		3
注申頓	注申頓	ワシントン		5
蘭頓	蘭墩	ロンドン		1
摩士頓	摩士頓	ホストン		1
波士頓	波士頓	ホストン		2
3 地名				
公哥突城	公哥突城	コンコルト		1
滿比厘阿	比厘阿	モンテベルリール		1
新灣	新灣	ノールト		1
紐含汾	紐含汾	ニューハーヘン		1
新港	新港	ニューハーヘン		1
育奈士迭國	育奈士迭國	ユニテトスタテス		1
大尼國	大尼國	デ マルカ		1
達厘多里	達厘多里	テルリトー		1
底士特力	底士特力	チストリック		1

雷西阿那	雷西阿那	ロイシアナ	1
戈攬彌阿	戈攬彌阿	コロンビア	1
查治當	查治當	ゼラルゼトウン	3
阿力山特厘阿	阿力山特厘阿	アレキサンテリア	1
馬里蘭	馬里蘭	マレイランド	9
馬理蘭	馬理蘭	マレイランド	1
洼治尼阿	洼治尼阿	ヒルギニア	4
馬沙朱碩士	馬沙朱碩士	マツサキセッツ	11
馬沙朱碩士	馬沙朱碩斯	マツサキセッツ	1
馬沙諸些	馬沙諸些	マツサキセッツ	20
馬沙朱些	馬沙朱些	マツサキセッツ	1
新普倫瑞克	新魯倫瑞克	ゾウブリユンスウエーキ	1
千尼底吉	千尼底吉	コンゾクチキュト	6
尼底吉	千尼底吉	コンゾクチュキット	1
新韓賽部	新韓賽部	ゾウハムプシーン	11
浙江省	支那の浙江	カラノセッコウ	5
緬	緬部	マイゾ	1
洼門	洼門	フルモント	5
那洼	那洼	トヘル ドヘル	2
博士茂	博士茂	ホルツモント	1
勃士茂	勃士茂	ボルツモント	1
華滿	華	フルモント	10
律愛倫	律愛倫	ロウデイスランド	3
摩士頓	摩士頓	ホストン	1
波士頓	波士頓	ホストン	2
波羅威頓士	波羅威頓士	プロヒデンセ	1
南洋	南洋	ナンヨウ	1
番	番	バング	1
普羅費典	普羅費典	フロビデンセ	1
袞特底格	袞特底格	コンゾクチュキット	2
哈得富耳	哈得富耳	ハルトホルト	2
賓而爾洼尼阿	賓西尔洼尼阿	ヘンセイルファニー	4



賓西洼尼阿	賓西洼尼阿	ヘンセイルファニー	1
紐惹西	紐惹西	ゾウエルセイ	2
邊西耳文	邊西耳文	ベンセイルファニー	7
新遮些	新遮些	ゾウエルゼー	4
推來	推來	スコイレル	1
地那洼	地那洼	テレワーレ	2
賓西爾洼	賓西爾洼	ヘンセイルプアニー	1
特連頓	特連頓	テレトン	1
底拉華	底拉華	ワーレ	3
阿西阿	阿希阿	ライ	1
阿嘻阿	阿嘻阿	オイヲ	1
哈里士麥	哈里士	ハルリスビユ	1
費治彌亞	費治弥亞	ビルキュア	1
阿那波里	阿那波里	アナボリ	1
霸地磨耳	霸地磨耳	バルチモレ	1
安那城	安那城	アナポリス	1
4 山、川、湖、島、海名			
亜罷拉既俺山	亜罷拉既俺山		3
勇士非爾山	曼士非尔山		1
墨魯山	墨魯山	バルド	1
阿爾臘牙時河	アル臘牙時河		1
阿魯士多河	阿魯士多河		1
洼爾魯士多河	洼尔魯士多河	アルノリスコヤン	1
贊河	贊河		1
美理麥大河	美理麦大河	メルリマック	1
美理麥河	美理麦河	メルリマック	1
千尼底吉大河	千尼底吉大河	コンゾクチュキット	5
千尼底吉河	千尼底吉河	コンゾクチュキット	1
北納士葛河	北納士葛河	ペノブスコト	1
根尼碧河	根尼碧河	ケンゾベリク	

基尼泊河	基尼泊河	ケン子ベリク	1
滾特底格河	滾特底格河	コン子クチュキッ	4
活得遜河	活得遜河	ヒュドソン	3
底拉華河	底拉華河	デラワーレ	3
底臘洼河	底臘洼河	デラワーレ	1
墨蘭地温河	墨 地温河	ブランチウイ子	1
蘇貴哈那大河	貴哈那大河	シュスケハンナ	2
蘇貴哈那河	貴哈那河	シュスケハンナ	1
頗多麥河	頗多麥河	ポトマック	1
伊里湖	伊里湖	エリイ	3
伊里大湖	伊里大湖	エリイ	1
宴爹利珂	宴爹利珂	オンタリヲ	1
宴爹利阿	宴爹利阿	オンタリオ	1
畜治	畜治	ニアガラ	1
古勃連湖	古勃連湖	カムフライン	2
汕玳連大湖	汕玳連大湖	カムシライン	2
鄱陽湖	鄱陽湖	ハンヨウ	1
緬法喇美哥湖	緬法喇美哥湖		1
尼比西河尼湖	尼比西河尼湖	子ピ子ピス	1
伊里大湖	伊里大湖	エイリ	1
阿蘭底海	阿蘭底海	アグランチセ	4
大西洋	大西洋	タイセイヨウ	2
地那洼海	地那洼海	デラワーレ	1
費拉地費	費拉地費	ヒラデルヒア	1
壓瀾的海	壓瀾的海	アタランチセ	1
壓瀾的洋	壓瀾的洋	アタランチセ	1
島			
羅底島	羅底島	ロウディスフント	5
南得吉島	南得吉島	ナンテュケット	1

湾				
底拉華大灣	底拉華大灣	デラワーレ		4
遮士壁灣	遮士壁大灣	セキペアケパーイ		1
5 人名				
綏林	綏林	ズウェデン		1
華盛頓	華盛頓	ワシントン		1

(カタカナ表記のないものは、原本で読んでいないもの)

## 2 まとめ

『海国図志』と『亜墨利加総記後編』の両書の調べによると、普通名詞などは、まだまだ多くあるが、以上の国名、地名、人名について、その異同をまとめて見ると、次のようになる。

- 1) 両書の漢字表記は、和訳本はほとんど『海国図志』の表記そのままである。
- 2) 年代の表記は、1冊のうちでも、統一していない。日本の年号に変わることもあるし、(ほとんどだが、例：我カ天明2年、後編1巻1頁)、当時の中国の年号そのままを書いている。(例：道光10年、後編1巻6頁)。
- 3) 国名、地名、人名の読み方をほとんど付けてあるが、難しい山名や河名などが、その読み方を付けていない場合も少なくない。例：士非爾山を曼士非尔山に訳して、という文字は日本がないから、を曼に換えて、恐らく、訳者は、このような文字が読めないから、付けていないのだろう。
- 4) 和訳本の後編1巻41頁1行目の「王后賜ノ所ノ地ト云フ義ナリ」のあとに、原本の「海口ハ底拉華ノ東ニアリ、邊西耳文ハ北ニアリ、費治弥亜ハ西南ニアリ」、この句は、和訳分の中に無い。
- 5) 漢字表記の内、国名、地名の書き方は、違う文字だけを以下のように例挙する。左は原本で、右は和訳本にする。

彌	弥	攬	攬	賓	窟
英	英	勞	曼	邊	邊
吉	吉	浙	浙	爾	尔
干	千	滿	滿	罷	罷
蘭	蘭	普	魯	臘	臘
頓	墩	含	含	蘇	蘓
奈	奈	港	港	灣	灣

注『海國圖志』と『亞墨利加総記全』とをめぐって — 人名、地名を中心に — 下河部行輝 (27頁) を参照による。

#### 参考文献

- 1 『四洲志』 侯官林則徐訳 『小芳壺齋輿地叢鈔』 「南清河王氏鑄版、上海貿易堂印行」
- 2 『海国図志』 60巻本 道光22年邵陽魏源、揚州本  
100巻本 咸豊2年邵陽魏源高郵州本
- 3 『亜墨利加総記後編』 広瀬達嘉永甲寅初夏新刊 雲竹小居蔵版
- 4 「鎖国時代 日本人の海外知識」 昭和28年  
開国百年記念文化事業会 鮎澤信太郎 大久保利謙編 乾天社
- 5 近代中国第17巻 「『海国図志』 余談」 佐々木正哉
- 6 岩井博士古稀記念論文集 「『海国図志』 小考」 百瀬弘
- 7 「江戸時代における唐船持渡書の研究」 大庭修氏 昭和24年
- 8 『日中文化交流史叢書(3) 思想』 源了圓 巖紹編 大修館書店